

童話が生まれた場所「未明の部屋」



◀高円寺の部屋にて（富樫啓撮影）

▼再現された「未明の部屋」



平成 27 年（2015）10 月、新たな展示場として「未明の部屋」を設置しました。ここは、小川未明が晩年を過ごした東京都杉並区高円寺の家の書斎を再現したものです。この家は老朽化により平成 26 年に取り壊されましたが、遺族の方々が大切に保管していた未明ゆかりの品々が当館に寄託されることになったため、開館 10 周年記念の一環として「未明の部屋」を再現することになりました。

この部屋は、未明が執筆活動を行っていた床の間つき 8 畳の書斎で、飾り棚を設けた出窓を配し、周囲の造付書棚には多数の書籍が並べられていました。部屋の中央にはテーブルや脇息、座布団、火鉢を、窓際には文机と電気スタンドが置かれていました。これらの展示品は、いずれも未明が愛用したものであり、一度は姿を消してしまった書斎が当館の中に新たに甦りました。

再現に当たっては、当時の写真や遺族の方々からの聞き取り等を参考に、未明が使っていた書斎の雰囲気や佇まいが感じられるようにしました。出窓に設置している“ガラス戸”は、唯一残った高円寺の家の建具であり、昭和期の建物の雰囲気をより一層際立たせています。

○晩年の未明



▲晩年の家の玄関に立つ未明（昭和 31 年）

19 歳で上京してから馬込や小石川などの下町で借家暮らしをしてきた未明ですが、昭和 5 年（1930）、48 歳のときに高円寺に移り住み、自分の家を持つことになりました。それから 20 年ほど穏やかに暮らしていましたが、晩年になると隣家から聞こえるピアノの音と大きな歌声が、未明を悩ませるようになりました。そこで、昭和 27 年（1952）、70 歳の時にとうとう引越しを決意、近所（高円寺）にあった「晩年の家」に移ったのでした。

晩年を過ごした家は、自然や路傍の石ころにも魂や精神性を感じる未明の居宅らしく、広い縁側に面した庭には、石の灯籠、水鉢、岩や自然石を配し、中央には小さな池が二つあり、豊かな緑の繁る落ち着いた佇まいが、来訪者の目を楽ませたといいます。

未明が執筆のために使っていたこの書斎には、北向きの窓辺に趣味の骨董を、縁側に盆栽が置かれていました。未明は午前中にここで執筆し、午後になると友人や若い作家、編集者が訪ねてきたり、近隣の蕎麦屋やラーメン屋、時には新宿の店まで飲みに行ったりすることもありました。特に同郷の作家・小田嶽夫とは親しく、近く中華料理店でチャーシューとビールで晩酌を楽しんだといっています。

散歩好きの未明でしたが、晩年の家に移ってからは、散歩に出ることを億劫に思うようになりました。「長い間机の前に坐って仕事をしてきたから、運動不足でしぜんに足が弱くなったのだろう」と、未明は時折思い立ったように、杖をつきながら庭を歩き、足を鍛えようとしていたそうです。